

## モーリシャス豆知識・小話 第3号

2017年7月

### (1) モーリシャスの一人あたりの国内総生産 (GDP)

外国人にとってモーリシャスは、夢のようなリゾート地ではあるけれど、小さくて資源もあまりなく、取り立てて製造業もなく、観光で生きている国、というイメージでしょうか。

しかし実際はアフリカの中でも各種経済指標が断トツに高く、ビジネスを行いやすい国と言われています。高速道路などの豊かな社会資本を見てもその一端はうかがい知れますが、実際、一人あたりの GDP は 9,000 米ドルを超えており、これはマレーシアやメキシコをも凌ぐのです。小国ではあっても豊かなこの国の目標は、目指せシンガポール！だと聞いています。

しかしそのためにはこれからが正念場とも言われています。観光だけでなく IT 産業の誘致、国際金融センターとしての環境整備、そのためには社会制度改革や人材育成もより充実させていかねばならないでしょう。他方、先進国並みの少子高齢化が進み始めているモーリシャス、中所得国から本当の高所得国へ変貌を遂げるための時間は実はあまりないのかもしれませんが。アフリカのグッド・ガバナンスを実現しているこの国の政治指導者達のリーダーシップにも期待したいところです。



### (2) 100 パーセント・モーリシャス人～あなたは何人？

モーリシャスに来てはや8ヶ月目に突入。ちょっぴり当地での生活にも慣れ、それが態度にも表れるのか、たまに「あなたはシノ・モーリシャン(中国系モーリシャス人)？」と聞かれると、なぜか、単に中国人と間違われるよりも嬉しがっている自分を発見したりして。それはともかく、ここはインド、欧州、アフリカ、中国など、本当に多様な人種・民族で構成されていますね。小さいいざごぎはあっても平和にお互いを尊重して共存している社会を実現していて、欧州の在外公館から異動してきた自分には新鮮な驚きです。

確かにルーツによって、例えばヒンドゥー・インド系は政界、官界に多く、

イスラム系、中国系は経済界に多いというような大まかな傾向はありますが、特定の民族・宗教でゲットーを作ったり、排他的なエリアとなっているところはないですね。チャイナタウンといっても、隣にモスクがあったり、インド系の人が野菜や果物を売っていたり。

当地中国大使館の人に聞いたら、ここの中国系は既に第4世代目にはいっているとのこと。中国との絆は健在らしいですが、既に3世代目（つまりおじいちゃんおばあちゃんが移民してきた人たち、今や壮・老年期です）でも中国語の能力は相当怪しい人が多いようです。上には上がいて、先日、祖先が1700年に当地に来たというフランス系モーリシャス人と知り合いました。海軍士官だったご先祖様が当地を気に入り土着したとのことですが、その時期って、まだかの有名なラブルドネ提督がポートルイス港を整備する前の話ではないですか。彼の奥さんのルーツも似たような感じで、なんとシャトー・ド・ラブルドネで暮らしていたらしいです。もちろん彼らの意識は完全にモーリシャス人とのことでした。



シャトー・ド・ラブルドネ

当館の若い現地職員が、「得てして我々モーリシャス人は先祖のルーツにこだわり、それを誇ったりするがそれはよくない、一人の例外もなく、我々モーリシャス人は単にモーリシャス人、皆がクレオール人なのだ」という趣旨のことを言っていました。つい最近来たばかりの外国人の私などには伺い知るよしもないですが、きっと遠い昔、植民者、企業家、奴隷、労働者等様々な背景を持って来た人々の子孫として背負う歴史的な重荷、みたいなものをこの人たちは感じて生きているのかもしれない。

でもこの若い職員のような考えを持ったモーリシャス人こそが、これからのモーリシャスをより魅力的な国に変えていくのだと思います。

